山づくりの新たな方途

郡上の山を守る。郡上の山を生かす。

郡上森林組合 谷口班（明宝気良地内で）

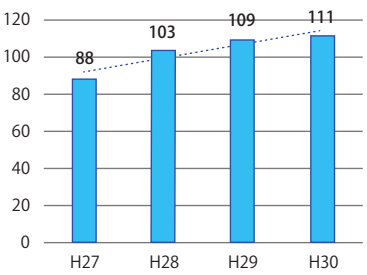
郡上市は、市域の約9割が山林です。見渡す限り山ばかりの郡上市ですが、見方を変えれば、圧倒的な森林資源を有する魅力あふれる地域と言えます。郡上市では、この豊富な森林資源を生かす取り組みが動き出しています。今月号では、官民が連携して進めている仕組みづくりや、エネルギーとしての活用、小さくてもローカルビジネスとしてお金を生み出している取り組みなどを紹介します。

山から伐り出す素材の生産量が大幅に増加

平成25年1月に、中国木材（株）、岐阜県森林組合連合会、郡上森林組合（以下「森林組合」）、（株）鷲見製材等で構成する長良川木材事業協同組合が設立され、平成27年9月に白鳥町において大型製材工場の稼働を始められました。市内に規模の大きな製材工場が出来たことで、森林組合を中心とした山づくりは徐々に変わりつつあります。そのひとつが、郡上の山から伐り出される素材生産量（住宅用材などに使われる木材の量）です。製材工場が稼働を始めた平成27年度に、郡上市全体で8万8千㎥だった素材生産量が、平成28年度には10万3千㎥、平成30年度には11万1千㎥と、年々増加しています。

森林組合の石田五秀（いしだいつひで）組合長は、「素材生産量の増加に対応するため、森林組合として生産性の向上に取り組んでいます。高性能林業機械の積極的な導入や、現場で作業を行う林業従事者の技術向上にも努めています。」と、林産部門の強化策を話されました。こうした取り組みにより、森林組合作業班の生産性は大幅に向上し、平成25年度に4・5㎥だった作業班1人の1日当たりの生産量が、平成30年度は8・5㎥まで増えたそうです。

郡上市の素材生産量　単位：千㎥



郡上農林事務所調べ

山に関わる関係者の連携強化で課題を解決

林業の現場では、課題も多くあります。森林組合や民間の事業体による山の木の伐採後には、植樹を行う必要があります。森林組合の笠野（かさの）和幸（かずゆき）代表理事専務は、「森林組合で

は年間50～60haの再造林（植樹）ができますが、この先、再造林が必要となる山は増える一方となります。造林後には、下刈りなどの保育作業が必要であり、これらに携わる人が大幅に不足すると思われます。この人材不足をどのように確保していくかについて、森林組合だけでなく、関係者間で話し合いながら、郡上の山を守り続けていくことが必要になっています。」と課題解決に向けた方向性を話されました。

山づくりを進めるためには、山林所有者の山への関心を高めることや、森林境界の明確化など一朝一夕には解決できない課題があります。こうした課題に向き合い、ひとつの産業として郡上の林業を成長させていくため、平成30年度に新たなプロジェクトが動き出しました。

右から郡上森林組合の笠野専務、石田組合長、郡上森林マネジメント協議会の樋口事務局長、原課長補佐

森林マネジメントによる人材育成と情報共有

平成31年2月に、木材の生産から加工、販売、利用に関わる事業者等の連携強化を目的として、「郡上森林マネジメント協議会（事務局2名）」が設立されました。協議会の事務局長を務める樋口享二さんは、「協議会はスタートしたばかりですが、やるべきことは盛り沢山です。その中で優先順位を決め、今は林業従事者の人材育成、技術指導に力を入れています。」とのことで、「森林組合だけでなく民間事業者とも森林に関するさまざまなデータを共有して山づくりに生かす仕組みづくりも検討している。」そうです。

石田組合長は、「木を伐って植える。また、天然林を増やすことも必要で、人工林と天然林のほどよいバランスとともに、生かし切れていない森林資源を多様な仕事につなげていくことも大事です。水と空気を生み出す大切な山を何とか残し、次世代へつなげていきたい。」と山づくりの大切さを強調されました。将来に向けては、「郡上森林組合は若い林業従事者が多いので、この中から自分で起業する若者が育ってほしい」と、新たな担い手の創出やその環境づくりの実現も望まれていました。

郡上の山を生かす現場の声

長良川木材事業協同組合
代表理事
大野 英輔さん

長良川木材事業協同組合に搬入される原木の量は、平成27年に工場を稼働して以降、年々増加していて、当初26,100㎥だった年間製材量が、今年度は、72,000㎥になる計画です。年間製材量の目標は10万㎥としていますが、さらに増やすことも可能です。また、郡上の山は、大きなポテンシャルを有していますので、取り扱い量を増やすだけでなく、すべて価値のある材として利用することも必要だと思っています。製材の工程で不要となる木の皮やおがくずは、木質バイオマスとして工場内で熱利用していますし、最終的には、山から出てきた原木を余すところなく使い切ることで、環境への負荷を極力少なくしていき、地産地消を実現しながら、災害に強い山づくりや林業全体の活性化など山側のさまざまな問題の解決に結びつけていきたいと考えています。

郡上市は、高速交通網の結節点として、これからますます優位性が高まっていきますので、当組合としても将来的に木材流通の一大拠点を目指していきたいと思います。

白鳥林工協業組合
代表理事
美谷添 里恵子さん

白鳥林工の従業員は現在18人です。森林施業の部門に10人、製材と事務で８人を雇用しています。事業体としては大きな規模ではありませんが、今年５月には組合が設立して50年を迎えました。森林施業は郡上だけでなく、県内各地で行っていますが、木材加工品については、地元での消費をもっと増やしていきたいと思っています。郡上の山の価値や、手づくりの価値を地元のみなさんに届けることが出来るよう、これからも事業を継続していきたいと思っています。郡上の山の将来を守るため、小学生を対象とした「木育活動」も行っています。こうした活動を通じて、山や木に囲まれている郡上に生まれて良かったと思う子どもが一人でも多く育ってくれることを願っています。また、白鳥林工の従業員は、市外からの移住者も多いのですが、幸いなことにほとんどの人が郡上に定住をしています。山の手入れをすることは、いろんな意味で郡上の人のためになり、還元もされるので、それだけやりがいのある仕事だと感じています。

明宝山里研究会と明宝温泉湯星館のみなさん
（研究会の松山会長は右から2人目）

山で余った材を活用し「地産地消」

原木を薪にしてエネルギー活用

木材に由来する再生可能な資源を有効活用

郡上市では、豊富な森林資源を郡上の誇りとして次世代へ守り伝えることを目的に、「郡上山づくり構想」を策定しています。この中で、森林資源の循環を目指し、地域材を活用した木質バイオマスエネルギーの利用促進を掲げています。

木質バイオマスエネルギーとは、「木材に由来する再生可能な資源」のことをいい、薪やチップ、ペレットなどがこれにあたります。市内での動きとしては、明宝温泉湯星館でのチップボイラーや薪ボイラー、明宝デイサービスセンターでの薪ボイラー利用があり、地域内において、小規模ながらエネルギーの循環システムが構築されています。

地域の中で需要と供給が結びつく取り組み

豊かな森林資源をエネルギーとして活用する取り組みが、明宝温泉湯星館での木質ボイラーの利用になります。間伐した材を搬出しても、用材として市場に出ない原木は、パルプやチップになるため、ボイラーの燃料として活用することで、エネルギーの地産地消を進めることにつながります。

また、明宝地域においてこの循環システムが可能になった理由として、「明宝山里研究会」の活動があげられます。会長を務める松山誠実（まつやま まさみ）さんは、「山で木を伐る人や運搬する人、原木を薪にする人がいます。地域の中で、多くの団体や個人が結びつくことにより、湯星館やデイサービスセンターの薪が確保されます。大事なことは、より多くの人が山を良くしたいと思う気持ちを持つことだと思います」と話されました。

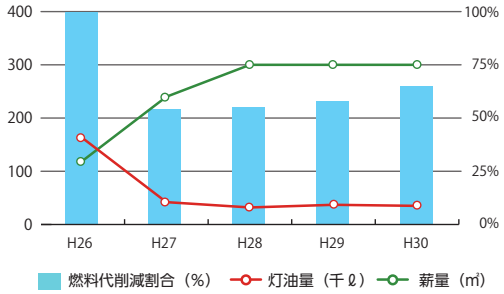
明宝山里研究会では、湯星館やデイサービスセンターへ薪を提供する業務のほか、最近増加傾向にある薪ストーブユーザー向けの薪販売も手掛けています。松山さんは、「薪ボイラーなどの木質バイオマスエネルギーは、地域の中で需要と供給が結びつく仕組みです。この小さな取り組みが、地域の大きな財産とも言える山に、もう一度関心を寄せるきっかけになれば。」と、今後、市の他地域への波及に期待を持たれていました。

地域の元気づくりを、一番身近な山の資源を使って実践するこの取り組みは、ローカルビジネスにもつながっている「郡上の山づくり」の好事例と言えます。

薪ボイラーは１日１㎥を使用

薪ストーブ用の薪は、年間70～100㎥を販売

湯星館における灯油量・薪量の推移等



燃料代削減割合は、H26年度を100とした場合の割合

身近な山の資源を使い 想いを込めて「ものづくり」

郡上市は、間伐材など、身近な木を使って木工を行う団体、また、山の恵みでもある鹿皮（しかがわ）などを使ったものづくりを行う人など、「山」に関わった仕事や活動をしている人が多い地域でもあります。このページでは、獣害として駆除された鹿皮を使うことで、先人が培ってきた、命を大切にいただくというサイクルを復活させようとする取り組み、竹に着目し、竹細工の伝統技術を継承しながら商品開発を進める取り組み、そして、木が持つさまざまな価値を、木製玩具を通して伝える事業について、実際の活動を紹介します。

皮

奥村（おくむら） 文乃（よしの）さん
（明宝）

明宝地域で地域おこし実践隊としての仕事を卒業し、今年から、鹿の皮を使った商品づくりの勉強を始めました。まだまだ学ぶことが多く、試行錯誤しながら商品開発を行っています。私がこの取り組みを始めたきっかけは、駆除された獣の多くが廃棄されているという現状を知り、「私たちの普段の暮らしでは厄介者になっている獣でも、それぞれ命があるので、なんとか違うかたちで生かしたい。」そんな気持ちで始めました。今、商品化を進めているのがベビーシューズです。肌ざわりの良い鹿の皮の特性を出しました。始めたばかりの小さな取り組みですが、郡上の山が少しでもよくなることにつながればと思っています。

木

野村（のむら） 純也（じゅんや）さん
（八幡）

私は、（株）郡上割り箸の経営に携わっています。山の資源を使って、「郡上割り箸」や「まあるいつみき」といった木製玩具を作っています。木のぬくもりを通じて、山の現状など多くの人に知ってもらいたいと思っていますが、川下（都市部）の人たちに向けては、山を守ろうといったことをダイレクトに伝えるのではなく、モノ（木の製品）を使ってもらうことが大事で、結果として郡上の木材がもっと流通し、山が良くなると思っています。山で伐られた木が価値を生み、消費者に届くという一連の流れに多くの人（事業者）が関わるので、森林施業から製材、製品加工などの分野で、しっかり情報共有ができる仕組みづくりが必要だと考えます。

竹

柏（かしわ） 春菜（はるな）さん
（明宝）

竹細工は、美濃市で学びました。竹かごや竹ざるなどは、昔は身近な生活の道具でしたが、今は、その技術を継承する人が減ってきました。竹を加工したり、細く割いた竹を編み込む作業はたいへんですが、この技術をしっかり学び、竹細工の商品として残していきたいと思っています。また、竹細工の魅力は、ナタや小刀という原始的でシンプルな道具だけを使って、小さく平たい笊（ざる）から大きくて高さのある籠（かご）まで、さまざまな形、サイズのものが作れることです。素材の色あいを生かせることも魅力です。竹林の整備が行き届けば、良い竹が生まれ、それが商品づくりにも生かせるので、郡上の山にも思いを寄せながら、これからも技術を磨いていきます。

トピックス

木工旋盤で木の器づくり

NPO法人ななしんぼ（明宝二間手）のものづくり工房において、「森の恵みの木工旋盤講座（リーダー育成編）」が開催されています。山に放置されたままの広葉樹を使い、日常の暮らしに身近な器などをつくることで、少しでも多くの人に山への関心を高めてもらう取り組みです。講座は、NPO法人ななしんぼが企画し、明宝を中心にチェーンソーアートづくりなどの活動を展開している「明宝ウッドリバイバルズ」のメンバーが参画しています。また、森林施業をしている市内の若者や岐阜県森林文化アカデミーの学生が参加しています。暮らしにつながる森の恵みを体感する講座として、今後も継続して開催される予定です。